

令和 8 年 2 月 4 日

松阪市議会議員 濱口 高志 様

至誠会 沖 和哉

至誠会先進事例視察報告書



先進事例視察を実施いたしましたので、下記のとおり報告いたします。

令和 8 年 1 月 27 日 (火)

視察先 狛江市

テーマ 議会だより「GG (ギカイガイド)」の編集について

担当者 狛江市議会議員 北見 昌士 氏、狛江市議会議員 篠 浩司 氏
狛江市議会事務局 次長 垣内 素峰 氏

令和 8 年 1 月 28 日 (水)

会場 東京ビッグサイト 東ホール

テーマ 防災産業展 2026/グリーンインフラ産業展 2026/G 空間 EXP02026

参加者 至誠会 沖和哉、野呂一平

目的 (1) 議会広報のさらなる充実と市民への情報発信力の向上を図るため、狛江市議会の「GG (ギカイガイド)」について、その編集方針、企画立案の考え方、制作体制および市民への浸透手法等を調査研究すること。あわせて、紙媒体およびデジタル媒体を活用した効果的な議会広報の在り方について知見を深め、今後の松阪市議会における広報活動の改善および市民参加の促進に資するものとする。

(2) 松阪市は沿岸部と中山間地域を有し、地震・水害・土砂災害など多様な災害リスクを抱えていることから、地域特性に応じた防災・減災対策の充実が求められている。本展示会において最新技術や先進事例を調査し、本市の防災施策および持続可能なまちづくりへの活用を図ることとする。

1 概要 (狛江市について)

面積 6.39km² 総人口 83,670 人 (R8.1 現在)

狛江市は東京都多摩地域の東南部に位置するコンパクトな都市で、面積は東京都内で最も小さく、日本国内でも二番目に小さい市である。新宿から電車で約 20 分、小田急線「狛江駅」を中心としたベッドタウンとしての性格が強く、人口密度の高い都市で住宅地として発展している。また、多摩川や野川など自然環境にも恵まれ、歴史や文化資源も顕在化したまちとしての魅力もある。

2 ギカイガイド GG について

(1) GG (ギカイガイド) とは

① 「GG」の位置づけと概要

狛江市議会が発行する「GG」は、定例会・臨時会の概要、委員会活動、視察状況等を市民に伝えるための議会広報紙で、年 4 回発行。従来の「市議会だより」を令和 3 年 6 月発行分から全面的にリニューアルし、議会に関心の薄い層にも議会活動を知ってもらうための「入口」としての役割を担っている。名称の「GG」は「ギカイガイド」の略称で、親しみやすく呼びやすい名称とされている。

② 編集体制と基本コンセプト

GG の編集は、市議会だより編集委員会 (議員 6 名が中心) によって行われている。編集の基本コンセプトは「とってもらう、みってもらう、よんでもらう」の 3 点であり、議会の情報を一方的に伝えるのではなく、市民が自ら手に取り、読み進めたいくなる紙面づくりを重視している。

③ 誌面構成とデザイン上の特長

① 視覚的に読みやすい誌面構成

従来の文字中心で情報量の多い議会だよりから脱却し、写真や余白を効果的に用いたレイアウトを採用している。誌面全体のデザインは「風通しのよい市議会」をイメージしており、ロゴデザインにもその意図が反映されている。

② 特集ページの重視

GG では、見開き 2~3 ページ程度の特集ページを設け、市民の関心を引きやすいテーマを取り上げている。特集内容は編集委員会で議論のうえ決定され、議員自らが取材や写真撮影を行うなど、主体的な編集が行われている。

④ 議員主体による編集の特長

① 議員自らが取材・執筆に関与

GG の大きな特長として、編集委員である議員が取材・インタビュー・写真撮影等に直接関与している点が挙げられる。議会の主体性が誌面に反映されている。

② 議員の人柄が伝わる構成

一問一答形式のページなどを通じて、議員の考え方や人柄が伝わる工夫がなされている。質問内容は編集委員全員で検討され、市民と議員との距離を縮めることを目的としている。

⑤ 市民参加・市民意見の反映

GGの編集にあたっては、市民モニター制度やWebアンケートを活用し、読者の意見を誌面づくりに反映。リニューアル後は、「読みやすい」「議会が身近に感じられる」といった肯定的な意見が多い。

(2) 松阪市議会だより「みてんか」と広報広聴（現状）

① 掲載内容と誌面構成

市議会だより「みてんか」は、定例会・臨時会の審議概要、議決結果および各議員の賛否、一般質問の要旨、委員会活動や行政視察の概要など、議会活動の記録性・網羅性を重視した構成となっている。公式記録を市民に正確に伝えるという役割を果たしている点が特徴である。

② 情報アクセシビリティへの配慮

松阪市議会だよりでは、視覚障がい者等への配慮として、音声版（MP3）、デジター版（録音図書）を作成・公開しており、情報アクセシビリティの確保に積極的に取り組んでいる。

③ 松阪市議会だよりの主な課題

① 情報量が多く「読み切る」負担が大きい

「みてんか」は、正確性と網羅性を重視するあまり、文字情報が多く、議会に関心の薄い層にとっては「手に取って最後まで読む」ハードルが高い構成となっているのではないかと。特に若年層や忙しい世代にとっては、必要な情報にたどり着きにくい可能性もある。紙面を「関心喚起の入口」として位置づけ、詳細情報はWEB等へ誘導していくことで役割分担を検討するなど、課題としたい。

② 「議会の顔」が見えにくい

松阪市議会だよりでは、議員個人の考えや人柄よりも、会議結果や制度説明を中心に構成されているため、市民にとって「誰が、どのような思いで議論しているのか」が伝わりにくい面がある。GGでは、一問一答形式や議員自らの取材・執筆を通じ、議員の人柄や姿勢が伝わる工夫がなされている。

③ 市民参加・フィードバックの仕組みが限定的

松阪市議会だよりでは、情報提供が主目的となっており、市民の意見を継続的に誌面づくりへ反映する仕組みは限定的である。狛江市では、市民モニターやWebアンケート等を活用し、読者の声を編集に反映させる仕組みが明確に位置づけられている点が特徴である。

④ 関心喚起型広報としての位置づけが弱い

松阪市議会だよりは「正しく伝える」役割を十分に果たしている一方で、「議会に関心を持ってもらう」「行動につなげる」という観点では、誌面構成や表現手法について更なる工夫の余地があると考えられる。GGは紙面だけですべてを伝えるのではなく、議会への関心や政治参加につなげるための導線として機能している点が大きな違いである。

3 説明および質疑応答

(1) 役割分担と編集方針

編集：議会編集委員会（6名）/事務局はあくまでサポート/委託事業者：デザインおよび撮影

編集委員の役目：特集（見開き2ページ）および表紙デザイン

議案等のページ：議員の色が出ないように「事務局」が作成。質疑や討論のなかったものは載せない

一般質問のページ：議長を除く21名が毎回80分の一般質問をしている

一般質問は議員それぞれの「色」のかたまり

一問一答のページ：市民には好評（ココしか見ていない人も多い）

議員それぞれが50文字/堅いテーマと柔らかいテーマを交互に選択

現在はGGのWebアンケートでテーマを募集している

※政治からみの答えはNO

(2) 委員会は月1回程度くらい（および編集打ち合わせを数回）

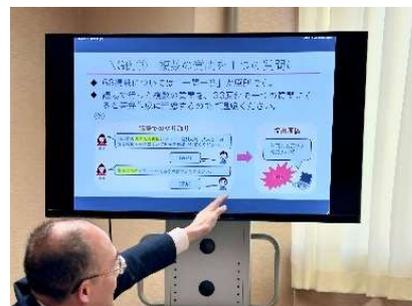
1冊を作るのに2回に落ち着いた/別に特集の取材もある

(3) 年間単位で大枠のテーマを設定（裏テーマ）

R4 子ども「考える・備える・遊ぶ・見守る」

R5 健康 /R6 防災 /R7 狛江市の宝物

※民間の企業を扱う時は「公平性」を担保。



(4) ≪季節ごとの色（4テーマ）≫

ピンク/緑/青/オレンジ

大枠の4テーマの内の最初の1つは前委員会で決めておく

色・紙面構成・型などを分かり易く伝える。編集マニュアルを作成（教科書的な使い道）

(5) リニューアルのコンセプト「とってもらう・みてもらう・よんでもらう」

議会だよりモニターからの市民の声があった。20~40代の若年層に向けたデザイン・構成。

サイレントマジョリティーにささる「議会だより」にしていきたい

≪議場の活用≫

議場コンサートや議場結婚式/台風の避難所 など

議会のことを幅広く知ってもらえる活動も行っている

4 所感

今回の狛江市議会の視察を通じ、議会広報の在り方について多くの示唆を得る機会となった。狛江市議会の「GG」は、議会活動の内容を網羅的に伝えることよりも、まず市民に議会へ関心を持ってもらう「入口」としての役割を明確に位置づけており、その考え方は極めて印象的であった。

特に、編集委員会を中心とした議員主体の編集体制や、「とってもらう・みてもらう・よんでもらう」という明確なコンセプトのもと、市民目線で誌面構成やデザインが工夫されている点は、議会広報を単なる記録媒体から関心喚起型のコミュニケーションツールへと進化させている好事例であると

感じた。また、市民モニターやWeb アンケートを活用し、読者の声を編集に反映させている点は、議会広報と広聴機能を一体的に運用している点で大いに参考となった。

一方、本市議会における「みてんか」は、定例会や委員会活動、議決結果等を正確かつ丁寧に伝えるという点において、重要な役割を果たしている。また、音声版やデジ版の作成など、情報アクセシビリティへの配慮がなされている点は高く評価されるべき取組である。

しかしながら、情報の網羅性を重視するあまり、文字量が多く、議会に関心の薄い市民にとっては「手に取って読み切る」ことのハードルが高くなっているという課題も感じた。議会活動を知る以前に、まず関心を持ってもらうという視点が、今後はより一層求められるのではないかと考える。

今回の視察を踏まえ、議会だよりを「正確に伝える媒体」としてだけでなく、「議会に興味を持ってもらうための入口」として再定義し、紙面構成や情報量の在り方を見直していく必要があると感じた。あわせて、市民アンケートやモニター制度等を通じて、市民の声を継続的に受け止める仕組みを強化し、広報と広聴を双方向に機能させていくことも重要である。

議会の活動内容や意義が伝わらなければ、政治参加の裾野は広がらない。狛江市議会の取組を参考にしつつ、本市の実情に即した形で議会の広報広聴機能の充実を図り、市民に信頼され、開かれた議会を目指していく必要があると強く感じた。

(文責 野呂一平)

令和 8 年 1 月 28 日 (水)

防災産業展 2026/グリーンインフラ産業展 2026/G 空間 EXP02026

1. 主な訪問ブース

(1) 株式会社 ZENRIN (ゼンリン) ブースの出展内容と特長

つなぐ防災、ひろがる安心



① 出展の全体概要

株式会社ゼンリンおよびグループ会社である株式会社ゼンリンデータコムは、「地理空間情報で地域の未来をデザインする」をテーマに、G 空間 EXP02026 に出展している。

ブースでは、高精度地図データを基盤に、時空間解析や画像解析などの先端技術を組み合わせ、交通、防災、都市計画等の分野における地域課題解決に向けた具体的な活用事例が紹介されていた。

② 主な出展内容 (自治体業務との関係)

① 交通空白エリアの可視化と地域公共交通支援

ゼンリンの地理空間情報を活用し、既存の公共交通では移動手段の確保が困難な「交通空白」エリアを詳細に抽出する事例が示されていた。あわせて、公共ライドシェアや乗合タクシー等の新たな地域公共交通の運行を支援するシステム「NORAN」が紹介され、自治体における移動支援施策への応用が示されていた。

②避難所運営のデジタル化を支援するシステム

災害発生時に課題となりやすい避難者の入退所管理や、避難所状況のリアルタイム把握を支援する「シームレス避難所システム」が展示されていた。紙や FAX を中心とした従来の避難所運営をデジタル化し、情報の即時共有や職員負担の軽減を図る仕組みとして、自治体防災業務との親和性が高い内容であった。

③人流データを活用した分析・政策支援

ゼンリンデータコムによる出展として、人流データや車両プローブデータ等を統合し、来訪者の移動経路や滞在時間、周遊行動を可視化・分析する技術が紹介されていた。大阪・関西万博を想定した分析デモを通じて、観光振興やイベント経済効果の把握、施策立案への活用可能性が示されていた。

③ ZENRIN ブースの特長

①精度地図を基盤とした実用性の高い提案

単なる技術紹介にとどまらず、自治体業務に直結する具体的な活用シーンを想定した展示構成となっており、導入後の運用イメージが分かりやすく示されていた点が特長である。

②防災・交通・まちづくりを横断する複合的視点

交通、防災、観光、都市計画といった分野を分断せず、地理空間情報を共通基盤として横断的に活用する視点が示されており、スマートシティや地域 DX を考える上で示唆に富む内容であった。

③官民協働を前提とした展示構成

自治体との連携を前提にした事例紹介が多く、行政単独ではなく、民間企業との共創による課題解決を重視している点が強く印象に残った。

(2) 『地球 Labo』のブースの出展内容と特長



① 出展の概要

自然環境と調和したインフラ整備をテーマに、同社が提案する独自技術や取組を紹介していた。ブースでは、持続可能な社会づくりと防災・減災を両立させる考え方として、「サステイナ防災」という新たな概念が提示されていた。

② 主な出展内容

① AgriPoucher® (アグリポーチャー)

地球 Labo ブースの中心となる展示として、同社が開発した AgriPoucher® (アグリポーチャー) が紹介されていた。AgriPoucher®は、自然環境の機能を活かしながら、都市空間やインフラにおいて緑化、防災、環境負荷低減に寄与する技術として位置づけられており、未来のまちづくりへの活用可能性が示されていた。

② 「サステイナ防災」という新たなアプローチ

地球 Labo では、単なる防災対策ではなく、平常時から環境価値を生み出し、災害時にも機能を発揮する取組を「サステイナ防災」として提案している。この考え方は、グリーンインフラの理念と親和性が高く、環境保全と地域のレジリエンス向上を同時に実現する視点として紹介されていた。

③ 地球 Labo ブースの特長

① 環境と防災を一体で捉える提案

地球 Labo の展示は、環境対策と防災対策を別個に扱うのではなく、日常的な環境配慮が災害時の安全性向上につながるという一貫した思想のもと構成されており、グリーンインフラの考え方を具体的に体現している点が特長であった。



② 都市・地域スケールでの応用を意識した内容

展示内容は、都市部の公共空間やインフラ整備のみならず、地域全体での活用を見据えたものであり、自治体施策としての導入を想定した説明がなされていた。そのため、地方自治体におけるまちづくりや防災計画への応用を検討する上で、実務的な示唆に富む内容であった。

③ 理念と実装をつなぐ展示構成

「地球と共に歩む」というメッセージを前面に出しつつ、抽象論にとどまらず、具体的な製品・技術を通じてグリーンインフラの社会実装を意識した展示構成となっていた点が印象的であった。

(3) 【川端工業】ブースの出展内容と特長

① 出展の概要



同社ブースでは、備蓄型水洗トイレ「iZATo (イザト)」を中心に、避難所や公共施設等での実用を想定した防災トイレの仕組みや導入事例について紹介が行われていた。

② 主な出展内容

① 備蓄型水洗トイレ「iZATo (イザト)」

川端工業の主力製品である「iZATo (イザト)」は、災害時に課題となりやすいトイレ環境の確保を目的とした備蓄型の水洗トイレである。会場では実機展示が行われ、来場者が実際に構造を確認しながら、災害時における使用方法や運用イメージについて説明を受けることができる展示となっていた。

② 導入事例・活用シーンの紹介

ブースでは、自治体や企業を想定した導入事例や、避難所・公共施設・BCP 対策としての活用シーンが紹介されていた。単なる製品展示にとどまらず、平時からの備蓄、災害発生後の設置・運用までを含めた説明がなされており、実務的な視点で理解しやすい構成となっていた。

③ 川端工業ブースの特長

① 「トイレ問題」に特化した実践的な展示

防災産業展全体においても非常用トイレ関連の展示が多く見られたが、川端工業ブースでは、災害時に深刻化する「トイレ問題」に焦点を絞り、具体的かつ実用性の高い提案がなされていた点が特長である。

② 実物展示による理解促進

実機を用いた展示により、カタログやパネルだけでは分かりにくい構造や使い勝手を直接確認できる点は、自治体関係者にとって導入検討の参考になりやすい内容であった。

③ 自治体導入を意識した説明体制

ブースでは、自治体や企業の防災担当者を主な対象として、導入時の考え方や活用方法について丁寧な説明が行われており、避難所運営やBCP対策を具体的に検討する上で有益な展示であった。

2 所感



本視察では、G空間EXPO、防災産業展、グリーンインフラ産業展を通じて、デジタル技術、自然環境の活用、生活インフラの確保という、異なる切り口から「これからの防災・まちづくり」を考える多くの示唆を得ることができた。各ブースに共通して感じたのは、単なる技術展示にとどまらず、「自治体がどのように使い、市民の行動や安心につなげていくか」という実装を強く意識した提案であった。

株式会社ZENRINのブースでは、地理空間情報を共通基盤として、防災、交通、観光、都市計画を横断的に捉える視点が示されていた。特に、交通空白エリアの可視化や、避難所運営のデジタル化、人流データを活用した政策立案支援は、松阪市が抱える中山間地域と市街地が混在する地理的特性や、災害時の迅速な状況把握という課題に対し、有効な手段となり得ると感じた。今後の松阪市においては、個別施策ごとにデータを扱うのではなく、地理空間情報を横断的な「意思決定の基盤」として活用し、行政内部の連携強化と市民への分かりやすい情報提供を進めていくことが重要である。



地球Laboのブースでは、「サステイナ防災」という考え方が強く印象に残った。平常時には環境価値を生み出し、災害時には防災機能を発揮するという発想は、従来の「災害対応型」施策から一歩進んだ、持続可能なまちづくりの方向性を示している。AgriPoucher®に代表される技術は、都市部だけでなく地域全体での活用を視野に入れたものであり、松阪市においても、公園整備、公共施設、学校周辺などを通じて、グリーンインフラを防災・環境・教育と結び付けて展開していく余地があると感じた。防災を特別な取組としてではなく、日常のまちづくりの延長として位置づけていく視点が、今後ますます重要になると考える。



川端工業のブースでは、備蓄型水洗トイレ「iZATo」を中心に、災害時のトイレ問題という極めて現実的で切実な課題に正面から向き合った展示が行われていた。災害発生時におけるトイレ環境の悪化は、被災者の健康や尊厳を損なう要因となり、避難所運営の成否を左右する重要な要素である。実機展示を通じて、平時からの備蓄、設置、運用までを具体的にイメージできたことは、松阪市における避難所整備や BCP 対策を見直す上で大きな示唆となった。今後は、避難所の「数」や「収容人数」だけでなく、トイレを含めた生活環境の質を重視した備えが求められる。

今回の視察を通じて、松阪市のこれからを考える上で重要なのは、「デジタルによる見える化」「自然の力を活かした持続可能な防災」「生活の基盤を守る実践的な備え」など、これらを個別に捉えるのではなく、相互に補完し合う形で組み合わせていく視点であると感じた。

松阪市は、沿岸部と中山間地域を併せ持ち、地震・水害・土砂災害など多様なリスクを抱える一方、豊かな自然環境や地域資源にも恵まれている。今回得られた知見を踏まえ、今後は、防災施策を「危機管理」ととどめるのではなく、「まちづくり」「環境」「市民参加」と一体で進めていく必要がある。議会としても、こうした視点を持って政策提案や議論を重ね、市民にとって分かりやすく、実効性のある施策につなげていくことが重要であると強く感じた。

(文責 野呂一平)

【 展示会の様子 】

